

# 来訪者による生活景の捉え方に関する研究

渡邊 優<sup>1</sup>・佐々木 葉<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 非会員 早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建設工学専攻  
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail: yu-onp@ruri.waseda.jp)

<sup>2</sup> 正会員 博士(工学) 早稲田大学 創造理工学部 社会環境工学科  
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail: yoh@waseda.jp)

本研究では、独特な地形による空間構造を持ち、そこに現れる生活や風景も多様である都市、東京における生活の場を外から眺める主体、つまり来訪者に着目し、その生活の捉え方、生活に抱くイメージを読み解き、生活景の捉え方の特性を明らかにすることを目的とする。東京都心の住宅地にて現場実験を行い、被験者6名の生活景に対するまなざしや、評価の特徴を提示した。実験の結果を分析すると、被験者それぞれに生活景の捉え方に特徴はあるものの、共通の見方の中で生活景を捉えていることが明らかになった。

キーワード：生活景，場所の記憶，街路歩行実験，評価主体

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景

1990年代後半より、生活景という概念が注目され、まちづくりにおける重要性が指摘されている。生活景は後藤ら<sup>1)</sup>により「生活の営みが色濃くにじみ出た景観」と定義されているが、生活の営みというのは地域や住民により異なるものであり、その結果、立ち現われる風景も多様である。また、時代が変化し、特に東京のような都市ではライフスタイルや価値観、くらしのイメージが多様化している。そもそも、生活とは一体なんなのか。従来の生活景についての研究ではそこで生活している住民に焦点を当てて、生活景を評価したり、ヒアリングなどにより生活景と住民の関係性を明らかにするアプローチがなされてきた。しかし、生活景はその場で生活している住民にとって日常的なものであり、長い年月を経て無意識的に生成された風景であるため、大きな変化がない限り、住民に意識されることは少ない。言い換えれば、住民は環境と相互依存関係にあり、生活の場の一部になっているため、自分たちが暮らす場を評価したり、その価値を意識したり、新しい発見をするのは難しいと考えられる。

一方、生活の場を外から眺める来訪者の視点について考えてみる。子どものころに住んだ家や遊んだ場所が時折、頭に浮かぶといった経験は誰にでもあるものであろう。こういった場所の記憶は視覚のみならず、聴覚、触覚、嗅覚など、全感覚的な記憶と結びついて脳の深

層に保存されるという。そして記憶は記録されるだけではなく、反芻されることで現在と結びついている。こうした場所の記憶の多くは幼年期に馴染んだ風景であったり、あるいは人生の中で特別な感情を伴って体験した風景であったりするが、それらは日々の場所体験の中で醸成され、想起されることにより現在に立ち現われる<sup>2)</sup>。来訪者が外から生活の場を眺めるとき、生活景を魅力的だと感じたり、安心感を覚えたり、そこに物語を見出したり、見慣れた風景にある日突然新しい発見をするのは、現在、目の前にある場に自己の場所の記憶に深く刻み込まれた風景の断片を見出す瞬間であると考えられる。

また、東京のように独特な地形による空間構造を持ち、そこに現れる生活や風景も多様である都市は、物語のようにまとまったメッセージを発信する記号の連なりであるため、人が多様な視点から多様な興味を見いだしやすいと考えられる。

このように、都市の生活景、あるいは生活の場に対して、住民に限らない多くの人が自分の興味を見いだせるということは、その風景や場が意味のある、大事なものであると考えられるのではないかと。また、異なる背景や価値観を持つ様々な外部の主体によって多様な評価や解釈が生まれる場所というのは、生活景がゆたかな場所であるとも考えるのではないかと。

### (2) 研究の目的

本研究では生活の場を外から眺める来訪者に着目し、

来訪者の場所の記憶、生活景の捉え方、生活に対して抱くイメージを読み解き、多様な主体の生活景の捉え方の特性を明らかにすることを目的とする。そして、その特性がありふれた日常の集積である東京の生活の場を記述するためのひとつの着目点となることを期待する。

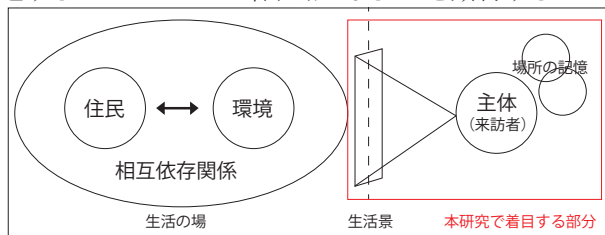


図 - 1 主体が生活景を捉える際の図式

## 2. 研究の概要

### (1) 用語の整理

#### a) 生活景

生活景とは「生活の営みが色濃くにじみ出た景観」、  
「人間をとりまく生活環境のながめ」と定義される<sup>1)</sup>。また、  
生活感とは大辞泉によると、「人が学び、働くなどの活動  
を行う、人間らしい雰囲気、また、住まいについていか  
にも人が暮らしているとわかるような雰囲気」とされてい  
る。本研究においては、上記の生活景、生活感の定義  
のもと、言葉を使うが、実験の際に被験者に生活景、生  
活感の言葉の定義を伝えることはせず、被験者の“生  
活”の認識にまかせて実験を進めることとする。

#### b) 場所の記憶

人が生きてきた中で、場所体験によってつくり、自然  
に醸成された全感覚的な記憶や体験のことをまとめて場所  
の記憶と呼ぶこととする。場所の記憶は現在と結びついて  
初めて存在し、人は無意識のうちに、この場所の記憶を通  
して現在目の前に立ち現れる風景を見ているという立場で  
研究を進める。

### (2) 既存研究

#### a) 街路景観に関する研究

街路において、景観構成要素と、人々が抱くイメージ  
との関係を探ったものにグレイン論<sup>3) 4)</sup> やまちなみメッ  
セージ論<sup>5)</sup> がある。福井らによるグレイン論<sup>3) 4)</sup> は特定  
のイメージ形成に寄与する共通の属性を持つ施設や要  
素をグレインと呼び、その密度や分布に着目してまちの  
イメージを分析するという理論である。都市空間の様々  
なスケールにおけるイメージ形成を論じることが可能で  
ある。また、平野は街並メッセージ論<sup>5)</sup> において、グレイ  
ン論などの先行研究が街路の景観構成要素を“もの”  
としてとらえていたのに対し、“情報”としてとらえ、認知  
心理学の立場からまちのイメージを論じている。人は街  
並メッセージとして建築物の内部活動情報を認識し、社  
会的安全性に起因するイメージを形成しているとする立

場である。また、筆者の先行研究<sup>6)</sup> においては、グレイ  
ン論を援用し、生活感というイメージが単にグレインのみ  
からきているのではなく、地形や建物などの空間構造、  
人の活動や音、匂いなどといった時間的な要因により、  
複合的に感じられるものだというを明らかにしている。

#### b) 生活景に関する研究

野崎ら<sup>7) 8) 9)</sup> は、尾道において、ヒアリングにより住民  
が生活景に対して、どのような印象を持ち、現在と過去  
の生活景をどのような知覚でとらえているのかを明らか  
にしている。また、古川<sup>10)</sup> は生活を営む主体が環境の  
中で行う行為に着目し、郡上八幡における行為の実態  
把握、生活主体の行為の履歴と生活場面のイメージや  
認識との関係性を探っている。生活主体である住民にア  
ンケート、インタビューを行い、住民の生活史に着目し  
ている。外から見て評価される生活景を、実際にその景  
を生み出し支えている生活主体がどう認識しているかと  
いうことを明らかにしている点は大きな成果である。この  
研究では、外から生活景を眺める主体については言及  
されていない。

#### c) 日常風景に関する研究

杉浦らによる地区の空間構造、歴史的建造物から地  
区の歴史的蓄積を把握し、ヒアリング調査を通じて日常  
風景を構成する風景要素から居住者の日常風景に対  
する嗜好性を捉えた研究<sup>11)</sup> や、吉本らによる日常風景  
のとらえ方の構造を把握するため、被験者に写真撮影  
をしてもらい、それをもとにインタビューを行う研究<sup>12)</sup> な  
どがある。これらの研究では住民を対象として自らが住  
む環境を評価してもらっている。

#### d) 原風景、心象風景から生活空間を分析する研究

生活空間計画の基本的価値を、継承されてきた居住  
空間の意味と価値におくべきだという立場のもと「原風  
景アンケート」により、子どものころの空間についての調  
査を行った研究<sup>13)</sup> や、子どもが形成した心象風景をま  
ちづくりを行う上での一つの切り口として捉え、生活空間  
が子どもの行動や体験にどのような影響を与えるかにつ  
いてその構造を探る研究<sup>14)</sup> などがある。これらは人の  
記憶や経験などのバックグラウンドに着目し、空間づく  
りの基礎的資料とし、豊かなまちづくりに活かしていこう  
という立場の研究であると言える。

#### e) 都市における人の行動に関する研究

人の行動に着目して、回遊行動の実験を行っている  
研究は数多くあるが、中でも高浜<sup>15)</sup> は街歩きの「体験」  
に対し、「行動」のだけでなく、「意味」を考慮して分  
析する手法を提示し、まちあるきにどのような体験があ  
るかを明らかにしている。実験は被験者に2名のペアでま  
ちを歩いてもらっており、各ペアのタイプも分析している。

### (3) 本研究の位置づけ

本研究のアプローチは、実験方法としては杉浦らや吉  
本らによる、写真投影法により、好きな風景や日常生活

の中で目に触れる風景について写真に収めてもらい、ヒアリングを行うというものに近い。加えて、筆者の先行研究において行った実験における反省点や改善点などを考慮し、本研究で行う実験の方法を決定した。生活景に関する先行研究では、環境と相互依存関係にある住民に着目して研究を進めることが一般的であったが、本研究では実験を住民ではなく外から生活の場を眺める来訪者に行ってもらい、結果を分析する。外部から生活の場を眺める来訪者を研究対象とし、そのまなざしを明らかにしようとしているところに新規性がある。また多様な主体による評価の統合によって生活景の豊かさを評価する可能性を見いだすところに有用性があると考えられる。

#### (4) 研究方法

来訪者を対象に、なにから生活感を感じているのかを把握するために、現場にて実験を行い、被験者に現場で写真撮影をしてもらう。撮影した写真をもとにしたインタビューや実験中に被験者が撮影した写真データ、実験中の被験者の歩行軌跡等を分析することにより、生活景の捉え方を提示する。

### 3. 現場実験

#### (1) 対象地概要

現場実験の対象地は新宿区余丁町、富久町周辺の住宅地である。被験者が多様な発見をすることを期待し、あえて建物が密集し、人の活動がよく見られる地域を選定した。新宿区余丁町、富久町は新宿区のほぼ中央に位置し、人口密度や世帯密度が高い地区である。用途地域は第一種住居地域および第一種中高層住居専用地域である。この地区は江戸時代は武家地で、多数の横

表-1 現場実験概要

日時	2012.05.19 ~ 2012.07.04 11:00 ~ 18:00	天候	晴れ or 曇り
対象地	新宿区余丁町、富久町の住宅地の全長約 600m の街路		
被験者	研究室卒業生 2 名、研究室修士 2 年の学生 4 名の計 6 名 (いずれも住民ではない)		
指示	① 地図に示された経路を歩いてもらいます。多少経路から外れた道に入っても、経路を戻っても構いませんが、指定された経路はすべて通るように歩いてください。 ② 経路を歩く際、被験者が歩いた経路を詳細に記録するため、筆者がビデオを撮影しながら追尾調査を行います。 ③ 経路を歩く際に、生活感を感じたら、どこ(なに)から感じたのか、要因となっているかを簡単に地図に書き込み、その様子がわかるように写真を撮ってください。 ④ 写真に写らないような音、におい、雰囲気などの要因も感じられれば地図に記入してください。 ⑤ 新鮮な気持ちでできるだけたくさんの発見をしてください。 ⑥ 実験に時間制限は設けませんが、30分を目安に歩いてください。 ⑦ 実験終了後にカフェなどに移動し、簡単なインタビュー調査を行います。実験中に撮影した写真や記入した地図を見ながら、写真や記入からだけでは読み取れない部分の補足説明をしてもらいます。		

表-2 現場実験の被験者の属性および実験、インタビュー日時詳細

被験者	属性	年齢 / 性別	実験日	実験時間	インタビュー時間	写真枚数
1	研究室 OB	25 歳 / 男	5/19sat.	11:15-12:00(45分)	12:55-13:15(20分)	51 枚
2	研究室 OB	22 歳 / 男	5/19sat.	16:10-16:35(25分)	17:15-17:30(15分)	27 枚
3	研究室 M2	24 歳 / 男	6/25mon.	16:55-17:20(25分)	17:40-18:00(20分)	29 枚
4	研究室 M2	23 歳 / 女	6/30sat.	11:00-11:25(25分)	11:45-12:05(20分)	33 枚
5	研究室 M2	24 歳 / 男	7/2mon.	16:50-17:25(35分)	17:50-18:50(60分)	97 枚
6	研究室 M2	24 歳 / 男	7/4wed.	11:00-11:40(40分)	12:05-12:40(35分)	86 枚



図-2 対象地広域地図



図-3 対象地写真



図-4 対象地詳細地図

(出典:googlemapより、筆者加筆)

町が存在した。現在では、1960年に足踏した歴史のあるまねき通り商店街があり、周辺には小規模な店舗や個人経営の飲食店なども多い。起伏はほとんどなく、ゆるやかな地形となっているが、街路は細く、入り組んでおり、形状は複雑である<sup>16)17)18)</sup>。

#### (2) 実験概要

表-1に現場実験概要を、表-2に現場実験の被験者の詳細を、図-5に実験の様子を示す。

#### (3) 実験方法

- ①被験者に上記の指示が書かれたカードおよび、経路が示された対象地の地図、カメラを渡す。
- ②被験者に写真を撮り、地図に記入をしながら経路を歩行してもらい、筆者は動画を撮影しながら追尾調査を行う。
- ③実験後、被験者が撮影した写真をパソコンのスクリーンで見ながら、インタビューを行い、ボイスレコーダーで記録する。



図-5 実験の様子

#### (4) 実験で得られたデータ

##### a) 被験者の歩行の様子を撮影した動画

被験者の歩行経路および、写真が撮影された正確な場所を把握するために使用する。

##### b) 対象地で生活感を感じたときに撮影された写真

被験者6名分の撮影写真(合計323枚)が得られた。写真はインタビューの際に用いるとともに、構図の分析に使用する。

##### c) 被験者のメモに使用された地図

被験者が実験中にメモを取るために使った地図が得られた。撮影した写真やインタビュー時の内容とほぼ対応しているため、今回は分析には直接用いず、参考程度にとどめるものとする。

##### d) 録音したインタビューのテキストデータ

実験後に被験者が撮影した写真を見ながら行ったインタビューを録音したものを書き起こしたテキストデータが得られた。このデータは被験者がなにをもって生活感を感じているのかを把握するために使用し、人が生活景を捉える際の特性を分析するために使用する。

### 4. 実験結果の分析・考察

#### (1) 被験者の歩行経路

##### a) 歩行経路、写真撮影箇所の記録

被験者を追尾し撮影した動画を見返し、6名の被験者がどのように歩行し、どの場所で写真が撮影されたのかを対象地の白地図にプロットした(図-6)。被験者の歩行経路や歩行速度は被験者により様々だが、生活景の捉え方には直接関係してこないと考えられる。

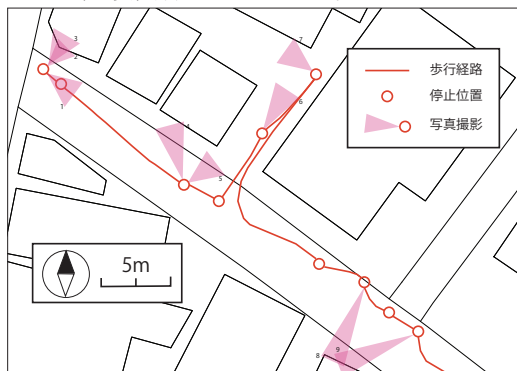


図-6 被験者の歩行経路のプロットの一例

##### b) 異なる観点から撮影された場所

1) で記録した地図および撮影された写真、インタビューでの発言を参照すると、同じ場所でも被験者により違った観点から撮影されている場所が複数箇所確認できた。図-7のよう



図-7 異なる観点から撮影された写真の例

に、同じ場所を撮影した写真であっても、インタビューでの発言では「植栽が線的に並んでいる感じがよい」「折れ曲がっていて奥に生活がありそう」とそれぞれの被験者が発言した。2人の被験者は異なる観点から写真を撮影していることが明らかになった。

##### c) 被験者の指摘が多い場所

1) で記録した地図を参照し、地図上で被験者の指摘(写真撮影)が多かった場所を把握した(図-8)。被験者の指摘が多かった場所は人が多く見られることであったり、コインランドリーや小規模な個人店舗など、生活に必要な場所が多く見られることがわかった。(図-9)。



図-8 被験者6名の写真撮影箇所



図-9 被験者の指摘が多くみられた箇所の写真

#### (2) 被験者の撮影した写真

被験者が撮影した写真の分析を行った。撮りたいものをズームして画面いっぱいに取り込んでいる写真、街路全体を写した写真、家のファサードや庭などある程度広い範囲を写した写真など、被験者により、被写体との距離感や写真の取り方に一貫した特徴が見られた。図-10は異なる4人の被験者が撮影した写真だ。それぞれ写真の取り方や構図などに違いが見られることがわかる。



図-10 異なる被験者が撮影した写真の一例

(3) インタビューのテキスト分析

a) 発言の分類

インタビューでの被験者の発言を書き起こしたテキストデータをその意味に着目して読んでいき、それぞれの写真について、被験者が、なにをもって生活感を感じているかを分類した。図-11のように該当する文章に下線を引き、分類のIDを付ける作業を行った。

テキストデータを分析した結果、生活景のとらえ方は表-3のような種別に分類でき、図-12のような捉え方で生活景をとらえていると考えられる。

あ、これは、クリーニング屋で、クリーニング仕立ててる音とか、  
 その隣で多分、従業員の人が喋りながら仕事してるっていうのが。  
 なんかこう、ドアが開いてるから、そういうのがわかって。  
 これは、このマウンテンバイクとか、自転車を撮った。まあ、  
多分これ、中学生か、小学生ぐらいが乗ってるんだらうなど。  
自分も昔こういうのに乗ってたからねえ、なんか懐かしいって  
 いう気もこめて。

図-11 テキスト分析の方法

①住民の存在

住民と環境が相互依存関係にあるということは既に述べたが、直接的なものでは人そのものや人の行為、間接的なものでは、音、匂い、建物の内部情報などがあげられる。

②空間の状態

空間に属するが、住民の行為により、そこに現れると考えることができるのが、植栽や洗濯物などの小さな要素や水をまいた跡、テープの跡などの痕跡である。これらは住民がそこになにか施したものとして受け取ることができると同時に、空間に溶け込み、一部となっていることから、空間と受け取ることもできる性質をもっている。その他には建物、建物や道全体を含む空間の構成があげ

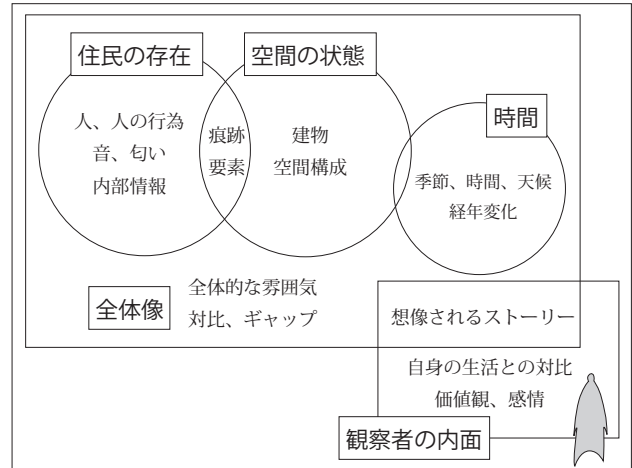


図-12 生活景の捉え方の図式

表-3 テキスト分析から抽出した被験者の生活景の捉え方の種別

ID	種別	例	生活景の捉え方
1-1	人	自体	住民の存在
1-2		密度	
1-3		ディテール	
1-4		行為	
2	音、匂い	ラジオの音 / バイクの音 / 小学校のチャイム	空間の状態
3	内部情報	磨りガラスの向こうが見えて / 家の中から人の声がして	
4	痕跡	打ち水がしてあった / セロテープの跡	
5-1	要素	自体	
5-2		密度	
5-3		ディテール	
5-4		置かれ方、置かれる環境	
6-1	建物	自体	空間の状態
6-2		密度	
6-3		ディテール	
6-4		用途	
7	空間構成	道が狭い / 囲われてる感じ / 奥まった場所	時間
8	経年変化	使い込まれてる / だいぶ年季はいつてるなあって	
9	時間、季節、天候	風が吹いて / 昼間の雰囲気 / 夕焼け / 夏だから	
10	全体的な雰囲気	全体的に / ものというよりシーン / 人の通りが醸し出す雰囲気	全体像
11	対比、ギャップ	バックにでかいマンションがあることによってこちらが際立つ / コントラストの問題で、これがなかったら全然着目しないポイントなんだけど、ちょっとワンアクセントあると生活感を感じる	
12	想像されるストーリー	たぶん几帳面な人なんだらうなって / お得意さんがたくさんいて生計たててるんだらうな / ずっと前から使ってるんだらうな	観察者の内面
13	価値観、感情	暮らしやすそう / 活気みたいなものを感じた / 雑すぎる / 隙がある感じ / すごい変	
14	自身の生活との対比	自分も昔こういうのに乗ってたから懐かしい / 自分の実家でこういうことやってたから、その記憶と重なって	

表-4 被験者ごとの発言から抽出した生活景の捉え方の種別の集計

ID 被験者	1-1	1-2	1-3	1-4	2	3	4	5-1	5-2	5-3	5-4	6-1	6-2	6-3	6-4	7	8	9	10	11	12	13	14	分類 合計	写真 枚数
1	2	1	0	3	7	0	1	15	2	2	17	0	0	1	4	16	0	1	2	0	4	1	0	79	51
2	5	4	5	3	0	1	0	5	0	2	0	0	0	5	2	3	0	0	0	0	17	4	0	56	27
3	3	2	1	3	3	6	0	10	1	5	5	1	0	0	4	0	1	0	1	0	16	2	0	64	29
4	0	0	0	1	3	4	1	9	0	7	8	0	0	3	1	0	2	0	0	1	29	6	1	76	33
5	8	3	7	8	5	14	3	35	2	30	5	4	3	8	17	0	0	3	8	6	52	1	4	226	97
6	1	0	0	1	6	2	0	26	3	16	13	4	0	32	12	9	6	1	5	1	21	12	4	175	86

られる。道の狭さ、形状に関する記述もこれに当たる。

### ③時間

季節、時間、天候など時間を伴う環境的要因、経年変化などの時間的蓄積があげられる。

### ④全体像

一つの建物や要素に限らず、建物、要素、人、すべてを含めた全体の風景についての指摘や前後の経路との対比などがあげられる。

### ⑤観察者の内面

立ち現れる風景に対してストーリーを見出す場合、また自身の生活の対比や価値観など、観察者自身の内面に起因する非常に個人的な記述がこの分類に当たる。

### b) 生活景の捉え方の種別の集計

a) の生活景の捉え方の種別に従って、被験者6名のそれぞれの発言に各種別がどれだけ出てきたかを集計した。その結果を表-4に示す。各被験者で特徴的な箇所には印をつけた。被験者1は、要素の置き方、空間構成に関する発言が多く見られる。被験者2は人とその様子から想像できることに関する発言が大部分である。被験者5は人や要素についての発言も多く見受けられるが、建物の用途に関する発言が多いことが特徴的だ。被験者6は、建物やそのディティールの描写が多く見受けられ、自身の価値観や感情を他の被験者よりも多く発言している。被験者5と被験者6に関しては他の被験者の発言にはあまりない自身の生活と比べての発言も見られる。

12～14の想像されるストーリー、価値観、感情、自身の生活との対比については1の人、5の要素、6の建物とセットになって発言に登場することもわかった。

このように被験者によって特徴やばらつきはあるものの、分類した項目はまんべんなく出てきており、被験者同士で共通の部分も見受けられ、基本的な部分では共通の見方があるものだと考えられる。

## 5. まとめと今後の展望

本稿では、現場実験を行い、被験者の歩行経路、撮影写真、撮影写真を見ながら行ったインタビューでの被験者の発言を分析し、被験者ごとに生活景の捉え方に特徴があること、また、特徴がある中にも基本的な部分では共通の見方があるということを明らかにした。

今回の現場実験は、研究室のメンバーという一般的に

言えば偏った価値観をもち、考え方が似通っていると考えられる人たちに行ってもらった。世の中にはより多様な価値観や観点をもった人がいるので、異なる属性の人に同じ実験を行う必要がある。同時に、今回は実験対象地に、人の活動が見られ住宅が密集している場所を選んだが、この場所で得られた生活景の捉え方が他の全く性質が異なる場所でも適用できるのかを検証する必要がある。

### 参考文献

- 1) 社会法人日本建築学会：生活景，学芸出版社，2009.3.30
- 2) 中嶋節子，陣内秀信，布野修司：場所の記憶を発掘する—記憶の棲家としての都市空間，すまいろん (61),p4-29
- 3) 福井恒明，篠原修：グレイン論に基づく街並みの歴史的イメージ分析，土木学会論文集 No.800/ IV -69,27-36, 2005.10
- 4) 田中秀岳，福井恒明，篠原修：グレイン論に基づく街路の下町イメージに関する研究，景観・デザイン研究講演集 No.2,2006.12
- 5) 平野勝也：街並メッセージ論とその商業地街路への適用，東京大学学位論文，1999.12
- 6) 渡邊優，佐々木葉：東京都心の街路空間の生活感印象評価に関する研究，景観デザイン研究講演集 No.7,2011.12
- 7) 野崎俊佑，千代章一郎：尾道市の斜面街区における生活景の形成，日本建築学会中国支部研究報告集第27巻，2004.3
- 8) 野崎俊佑，千代章一郎：尾道市の斜面街区における過去の生活景と感覚の問題，日本建築学会近畿支部研究報告集，2004
- 9) 野崎俊佑，千代章一郎：尾道市の斜面街区における現在と過去の生活景の問題，2004.8
- 10) 古川日出雄，佐々木葉：主体の行為に着目した生活景の記述 岐阜県郡上八幡を対象として，景観デザイン研究講演集 No.7,2011.12
- 11) 杉浦理子，山本聡，下村泰彦，増田昇：居住者の日常風景に対する嗜好性と地区の歴史的蓄積との関わりについて，ランドスケープ研究 62(5),1999
- 12) 小浦久子，奥俊信，吉本正樹，木多道宏，舟橋國男：日常風景のとらえ方に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，1997.9
- 13) 野老正昭，宇杉和夫，千葉智彦：原風景を生かした都市生活空間づくりに関する研究—港区三田・芝地区の原風景ヒアリング—，日本建築学会大会学術講演梗概集，2008.9
- 14) 建部謙治，松本直司，花井雅充：生活空間における心象風景と地区特性との関連性—子どもの心象風景に関する研究 その1—，日本建築学会計画系論文集，No.565,p217-223,2003.3
- 15) 高浜康亘，福井 恒明：行動と意味から見た街歩き体験の分析，景観デザイン研究講演集 No.7,2011.12
- 16) 財団法人新宿区生涯学習財団新宿区歴史博物館：新修新宿区町—地名の由来と変遷，2010.3.31
- 17) 財団法人新宿区生涯学習財団新宿区歴史博物館：新宿区の民俗 (5) 牛込地区篇，2011.3.30
- 18) 新宿区都市計画部都市計画課：新宿区の土地利用 2008—土地利用から新宿区のまちをみる。—，2008.3